

巻頭言

平成 20 年度技術専門委員会委員長
藤田 正治

学生のころ穂高砂防観測所に時々訪れ、研究者になってからもしばしば行っています。今は仕事を中心ですが、以前は休日の余暇を楽しむことが多かったと思います。かれこれ 25 年くらい通っていることになりましたが、観測所の志田さんには大変お世話になり、大好きな溪流釣りにも何回も連れて行っていただきました。鉄砲水に襲われ危機一髪ということもありましたが、これは研究面での貴重な体験になっています。志田さんは学生の面倒見が良く、研究面だけでなく、滞在中の後方支援的な働きを担っていただいています。このような支援は本来の技術室の仕事の範疇にはありませんが、学生や研究者が隔地観測所で円滑に活動するための重要な役割であると認識するとともに大変感謝しています。

防災研究所技術室は、少数の組織であるにもかかわらず、広く所内の技術支援に対して貢献しています。以前は、実験や観測の技術支援が中心でありましたが、情報ネットワーク管理、広報活動、オープンキャンパスなどの社会貢献など、支援の幅は広がっています。京都大学において、様々な運営管理が強化されつつあると感じる昨今ではありますが、情報セキュリティの管理など新たな管理も求められるようになると想像され、防災研究所の中で様々な問題に対して支援できるような組織作りに努めなければなりません。

平成 8 年度に技術室が組織化され、今年度で 13 年目に入り、干支で言うとふた回り目に入ったこととなります。組織化された技術室が成熟するためには、抱えている問題点を一つ一つ解決していかなければなりません。昨年度は大量の退職者を迎えるいわゆる 2008 年度問題や観測所技術職員の後継者の問題などについて解決してきました。しかし、今度は 2011 年度問題が懸案事項となっています。すなわち、技術室は約 20 年の差の開いた 2 つの年齢層で構成されていますが、年長の層の職員がすべて退職される 2011 年度に、室長の下に組織化されている技術室の組織上の維持に支障をきたします。議論の結果、グループ制を導入することで組織の柔軟化を図りましたが、技術室を取りまとめる立場のグループ長や室長候補者の不在はまだ解決されていません。技術室における技術の伝承とともに、技術室の組織の継続についても、今後議論しなければなりません。また、来年度新たに 8 名の技術職員が再雇用されます。この結果、技術室における再雇用者の比率が 4 割程度になります。再雇用者の皆さんは長年の経験により高い技術と知識を持っておられます。防災研究所を支える技術室の正規の技術職員が少ないことを考えますと、再雇用者の方にも、ぜひ、各所で経験を活かした質の高い支援をしていただき、もう少しの間、防災研究所の発展にご尽力いただきたいと思います。

末筆となりましたが、今年度退職される地震予知研究センター阿武山観測所浅田照行氏、同徳島観測所近藤和男氏、同屯鶴峯観測所藤田安良氏、流域災害研究センター穂高砂防観測所志田正雄氏、火山活動研究センター桜島観測所高山鐵朗氏、宇治地区技術室市川信夫氏、清水博樹氏、藤木繁男氏、中尾節郎氏の永年のご研鑽とご貢献に対して心から感謝いたしますとともに、ますますのご健勝をお祈りいたします。